

明珠

龍泉院
参禅会会報

巻頭言

是一顆珠は

いまだ名にあらざれども道得なり

これを名に認じきたることあり

一顆珠は 直須万年なり

亘古未了なるに 亘今到来なり

身今あり 心今ありといへども

明珠なり

彼此の草木にあらず

乾坤の山河にあらず

明珠なり

—正法眼蔵一顆明珠—

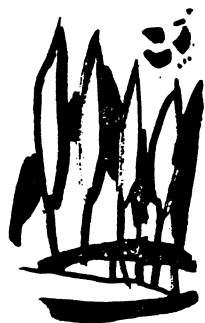
『明珠』とは、真如・仏性・法性・本来面目、などのたとえである。すなわち、真如・仏性・法性・本来面目などは、この世界における真実のすがたであり、常に円満で無欠無余、表も裏もなく、不二平等、内外玲瓏、キラリと光っている当体そのものである。したがって、これを明珠にたとえる。

『正法眼蔵』には、唐代の禅匠、玄沙師備の言葉、「尽十方世界一顆明珠」を拈提した「一顆明珠」の巻があり、尽十方世界が仏性一元の世界であり、自己本来の真実のすがたであることを示されている。

尽十方世界、すなわち、あらゆる世界は絶対真実のすがたであり、われわれにとっては、この与えられた現実を、徹底して強く正しく生きぬくことが、仏法の修行である。そして、坐禅こそは、この尽十方世界の行そのものであり、十方世界を坐断した無心のすがたにほかならない。

ここに、わが龍泉院参禅会の会誌を発刊するに当り、いみじくも、「明珠」と名づけるゆえんがある。ねがわくは、その名を汚すことなく、自己本来の真実相に直参直入して、宝珠をしてますます明光あらしめんとを。

龍泉院守塔 椎名宏雄 合掌



龍泉院参禅会の足跡

椎名 宏雄

龍泉院は曹洞宗の古寺である。

いわゆる禅寺であるから、坐禅はその根本行であり、随時に実施されるのは当然である。現住が住職を拝命した昭和三十三年以降、不定期な坐禅会としては、地元の小中学生、柏市のボーイスカウト、海上自衛隊下総基地の隊員、都立足立高校書道部、柏市商工会青年部、その他有志などによって随時に実施され、住職がその指導に当たって

きた。

それが、毎月第四日曜午前九時からという定期的な形で実施されるようになったのは、昭和四十六年七月二十五日（日）からである。最初であるから、参禅会の主旨や日時を書いた案内状をガリ版で印刷し、檀家非檀家にかかわらず、近隣の若者や知人宛に三〇通ほど配布した。その結果、八名の参加による第一回の定例参禅会が発足し

たのである。その中には、現在最古参となられた高間さんもおられた。

会のスケジュールは、原則として現在と同じであった。つまり、坐禅―経行―坐禅―講義―座談、というパターンは一四年間不変というわけである。ただし、その内容は多少変わっているが、最初の講義テキストは、『普勸坐禅儀』であった。坐禅の基礎を実地と理論の両面あわせて学ぼうとしたからである。つぎの第二回目は八月二二日（日）、この時の参加者は一名であった。

しかし、これを境として参会者は漸減し、翌四十七年から四十九年の初めごろまでは、わずかに三名から五名程度の参加にすぎなかった。参加一名の時が一度あったが、講義は一对一で如常に行った。参加ゼロの時が一度あった。この時はさすがに講義はとりやめて、住職ひとりで坐禅をつづけた。

開始後、数年の間は、参加者に毎月ハガキで次回の案内を差しあげていた。会員は少い時の方が、むしろ熱心であった。

四十九年の後半からは、新たに参会される方が増えてきた。五〇年八月の例会には、野口ヘルスアカデミーの野口洋子さんが参会され

た。これは、当時千葉テレビで坐禅の入門を放映する際に、住職がそのゲストに迎えられ、野口さんがその番組のキャスターをつとめるため、体験実習として参会したのであった。

実習といえば、五三年からは、四月の例会のあとに、裏の竹山でタケノコ堀りを実習することになった。別に、静から動へ、苦から楽への行というわけではない。たまたま、四月の末はタケノコの最盛期とかさなり、沢山ありすぎるのを処分していただくためにいるが、この月だけ参禅に来て漁父の利を占める？ご仁もいたようだ。その後、五五年までは、ほぼ毎回一〇人前後の参会を保っていた。ところが、旧本堂を老朽のために改築することになった。五六年二月に旧本堂を解体したので、この月からは大悲殿で坐禅を継続した。会日は日曜日のため、改築工事の騒音からはまぬがれたが、講義と座談は庫裡の裏手にある塾で行うなど、何かと不自由な一時期であった。しかし、熱心な参会者が常時一〇名近くは継続していた。

五七年三月、待望の新本堂が完成し、その初参禅会は三月二八日（日）で、参会者は八名であった。



龍泉院山門

これは、奇しくも四六年の第一回の時の人数に等しい。八名中、森岡さん、小畑さん、寺田さん兄弟、富田さん、武山さんが、現在常連の中の顔ぶれである。

五八年の三月からは、参会者が二〇名以上に倍増してきた。これは、当時世間で坐禅の入門書が何種か発行され、そこに坐禅会場の紹介記事があり、千葉県内の常磐線沿線では龍泉院だけがリストアップされているのを見た方たちが、多く参加されたためである。したがって、参会者の範囲は、柏や我孫子はもとより、松戸や流山方面からの遠方の人も多くなってきた。

会員が増えると、月一回の会では互いに名前も住地も記憶できない。そこで、有志の発案により名簿への記帳がなされ、やがて胸に名札を付けることになった。こうして、五九年には例会だけで延べ二五〇名にのぼる参会者となった。坐蒲の増補と坐蒲架の新調、物入れに用いる禅函の奉納など、備品類も逐次整えられてきた。

あたかも、五八年からは有志の要望によって、月例会とは別に成道会が一二月四日（日）に奉修された。一般二名、僧三名の参加により釈尊の成道を讀める報恩行が行われたのは、おそらく当山は

じまって以来の行事であろう。五九年一二月二日（日）には第二回目の成道会が奉修され、一般三名、僧侶四名の参加であった。

この行事で特筆すべきは、成道会の企画、進行、運営すべてが、参禅会員によって自主的になされていることである。むろん、その陰には実行委員の方々による並々ならぬ苦勞があつての賜であり、深く感謝するものである。

さて、発足から満一四年、光陰の速さには驚くばかりである。この間、一度でも参加した人の数は、ほぼ一五〇名に達する。現在の常連は約四〇名であるから、すでに一〇〇名以上の人がやめたことになる。もちろん、転居や結婚などでやめた人もいる。また、参加資格不問、やめるのは自由、会費無料という気やすさが当山の特徴であるから、新旧の交代が多いのは当然である。ただ、せっかく坐禅というすぐれた「精神文化」に一度は接しながら、この好縁を永続できない人が特に若者たちに多いのは、いったい坐禅という行のもつ宿命なのか、はたまた住職の不徳のいたすところなのであるうか。

憶えば、発足時から四九年初めごろにかけて、参会者が最も少

った時期は、ちょうど高度成長が極に達した時と重なる。神武景気を欧歌し、モーレッツ社員が喜ばれ人手不足が深刻な時期に、のんびりと坐禅などしている者は、よほど変り者と思われたのだろうか。これが、オイルショックの影響が深刻となってきた五〇年ごろからは、会員漸増に転じている。本質的には世情の動きと無関係であるべき坐禅会も、所詮は人の集まりである以上、時代的制約を受けるのは避け難いのであろう。

会員の変遷を回顧すると、五五年ごろまでは、下総基地の隊員が常に何名か参加していたが、その後は皆無となっている。また、最近では会員が増えてはいるものの、大半は中年以上で占め、若者の少いのがやや残念である。地元檀家の人も皆無に近い。この辺に、今後の重要な課題があろう。

また、講義テキストについては、最初は『普勸坐禅儀』、ついで『正法眼蔵随聞記』を五年間ほど読んだ。以後は、『瑩山禅師法語』『智首座に与ふる法語』『覚阿上人に与ふる法語』など宗門屈指のカナ法語を讀み、五四年正月からは『正法眼蔵』に的をしばった。これまでに、弁道話・現成公案・生死・道心・仏性、の各巻の順に進

み、近く難解かつ長文の仏性巻を讀み終る予定である。

以上、わが龍泉院参禅会の足どりを長々と回顧してきた。この会が今後いかなる歩みを続けるかはわからない。が、どんな栄枯盛衰があろうとも、この種の会はただ努力精進あるのみである。ここに発会後一五年目を迎えた昨今、会員諸氏の努力によって会誌が創刊される。これを期とし、従来の足どりを回顧し記録することは、たんに温古知新のためではない。常に求めてやまぬ「仏向上の世界」を目ざすためにほかならぬことを、さいごに銘記したい。



成道会香語

天徳山主

一見明星道即成 山川草木放光明
大悲世尊茲現出 三界初聞說法声

恭惟 本月本日 奉値大恩教主本師釈迦牟尼仏大
和尚成道之令辰 当山參禅会会員 臨一堂聚浄心
既結報恩之禅定 茲虔備香華灯燭湯菓茶珍饈 諷
誦摩訶般若波羅蜜多心經 所集殊勲 上酬法乳之
慈恩 慈悲容納
一灯能伝百千灯 此界遍泊無量情

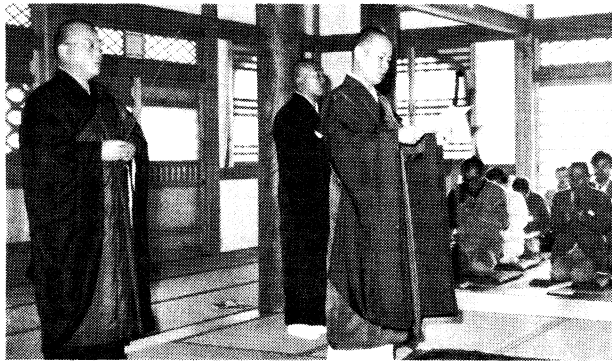
明星を一見して道、即ち成ず。山川草木、光明を放
つ。大悲世尊、茲に現出し、三界、初めて聞く説法
の声。

恭しく惟れば、本月本日、大恩教主本師釈迦牟尼
仏大和尚成道の令辰に値い奉り、当山參禅会会員、
一堂に臨み浄心を聚め、既に報恩の禅定を結び、
茲に香華灯燭湯菓茶珍饈を虔備し、摩訶般若波羅
蜜多心經を誦誦す。集むる所の殊勲は、上法乳の
慈恩に酬いんことを。慈悲容納。
一灯、能く伝う百千の灯。此界、遍ねく泊おす無量
の情。

第二回成道会盛況に行わる

五九年二月二日（日曜）の午
前九時より、第二回の成道会が行
われました。お釈迦さまがおさと
りを開かれた二月八日の日を記
念して行われる、禅宗独特の行事
です。

お釈迦さまは、苦行六年ののち
山から里へくだり、菩提樹の木の
下で静かに坐禅三昧に入られ、一
二月八日の朝、あけの明星が光る



成道会法要 椎名老師による香語奉読

のを見た瞬間に悟りを開かれ、人
間から仏陀となりました。

私たち仏教徒にとって、この成
道会はお釈迦様が誕生された四
月八日の花まつり、入滅された二
月一五日のお涅槃会とともに、三
仏忌の一つとして尊い記念すべき
日であり、全国各地で報恩の行事
が行われています。

千葉県ではあまり盛んではあり
ませんが、龍泉院では一四年ほど
前から続けている参禅会が、最近
は活況を呈し、会員の希望と主催
による成道会が一昨年から行われ
ています。

第一回の参加者は、一般二二名
僧侶三名でしたが、第二回目は二
〇才代から七〇才代まで、一般三
〇名、僧侶四名、合計三四名の参
加でした。遠くは松戸市や千葉市
から、熱心に参加されました。

内容は、九時から一時間程の坐
禅、つぎに読経法要、住職の法話、
昼食、茶話会の順に午後二時まで、
お釈迦さまの成道を讃え、報恩の
ための行事を行いました。
（「龍泉院だより」第二号より）

衆縁をいたゞいて

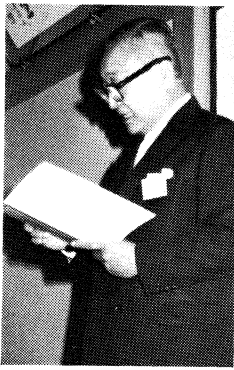
―龍泉院参禅のこと―

高間 利介

参禅にお誘いを頂いてこちらに寄せて頂くようになってから、もう一四年の余にもなるとお聞きして、いつの間にかそんなに時が経ったのかと、改めて思いを潜める次第です。

旧制中学に在学の頃、学校の運動場が武蔵野在の平林寺境内にありまして、夏季合宿や春秋の運動会、クラス会等でその寺を訪れ、老僧や若い雲水がたにお会いし、清寂な境内の清掃等をした覚えがあり、そんなことを懐かしむ思いもあって、参禅させて頂いたのが、動機でした。

ただ坐る。ただ坐ってご講義を



成道会反省会にて挨拶される高間さん

聴き、座談に茶菓などを頂き、何人かの方が感じていることなどを話して下さる。わたしは饒舌で、それに何か余計なことを喋り、あとで「はしたないことを」と、後悔することが多くありました。そんなことで楽しい思い出というよりも、いつも青臭い自分を知って、砂を噛む思いの方が多かったように思っています。

そして、この思いは今も続いている、自分が表に出る、表に出る、他のみなさまの修行の邪魔になると思っっています。然し何も喋らなければ折角のみなさまの和やかな輪も損なわれる。喋ればまた自分が出て、折角の雰囲気も損なってしまう、何かを押しつけたことになりはしないか。「ただ坐る」、「坐り込む」、ということとは、ほんとうに難しいことだと思いつづけて参りました。

一年、一年をただ平たく並べるのではなく、薄紙のような一年ではありますが、それでもそれを積み重ねていくということが、一年からの成道会となり、また参禅に何うと、「誰それさんは今日も来られるかしら」と人を懐かしむ気持ちも出てくるようになりまして。そして今年は、お互いの心を繋ぐようですが、このような会誌

も創刊されることになりました。

一五年、一年一年を思えば進歩もなにもないようでしたが、積み重ねてみると、今昔の感というか、ずしりと何か重厚なものを感じます。これからまた一五年、どんな

格好でお次ぎの方に申し送れるか、ただ一隅を照らすの心で、みなさまの後姿に安堵を求めて、参禅を続けて参りたいと思う許りであります。

今、成道会に思うこと

昨年一二月二日、お悟りを開かれたお釈迦さまの成道を祝して参禅会員三〇名が龍泉院に集い、ご住職ならびに近在の僧侶の方々三名のご参加をいただき、報恩のための行事を行いました。坐禅・読経法要・ご住職の法話・昼食と順を追って進み、最後にお茶をいただきながら参加者の皆様よりその感想をお聞きする機会を得ました。今ここに当日を偲びまとめさせていただきます。(敬称略)

高間利介(沼南町泉)

金崎 史(沼南町大津ヶ丘)

昨年の成道会は二〇余名で行なわれましたが、今年は三〇余名と参加する方々も多くなりまた今日は昨夜からの雨ですっかり塵を振り、素晴らしい天気となりました。これも仏様のお慈悲と受けとめ、一層精進させていただき、地域の明るい灯になりたいと思います。





第2回成道会参加者一同（59.12.2）

四宮清二（松戸市五香六実）

参禅で坐るたびに足が痛んでいましたが、今日はとてもよく坐れたように思います。

八木下真司（柏市東台本町）

今日で四回目の坐禅ですが、坐禅の間何も考えずに無になることのむずかしさを感じています。

有村明子（柏市今谷上町）

九月に父が病いでたおれ、その時、沢山のお経を読ませていただき、いつか救われている自分を見つけ有難く感じました。

染谷のり子（柏市柏）

まだまだ足の痛いことが気になる坐禅ですが、今日ご住職の法話でお聞きした因果の道理は本当に心に染みて感動いたしました。

寺田健二（柏市東中新宿）

家の台所に貼られているカレンダーの第四日曜日は「お父さんの坐禅」と書きこまれており、私の坐禅には女房も一所懸命応援してくれているのが現状です。

鈴木英司（我孫子市新木）

ご住職からお話のあった因果の道理について、目のさめる思いで感動いたしました。

森岡俊雄（船橋市藤原町）

坐禅の姿勢をそっと直していただいた時は本当に嬉しかった。自分の気付かなかったことでした。

沢村国勝（習志野市東習志野）

これからも皆様とご一緒に坐禅を継続して楽しくやりたいと思います。

五十嵐嗣郎（柏市布施町）

坐禅に参加させていただいて今日が三回目です。無為に土・日を過ごすことが多い私ですが、会社で「坐禅をはじめたよ」と話したら「若いのに悟ったようなことをやるな」とからかわれました。私は今、坐禅をはじめると無になるどころか一週間会社であったことが浮かび上り、坐禅で整理しているような気分です。姿勢を正しく坐禅をやりたいと念願しています。

藤原 公（松戸市野菊野）

私が所用でタイの国へ行った時でした。知りあいの七五歳のおじいさんの誕生日にご招待を受けました。その家には四人のお坊さんが来ており、お祝のためにお経をあげておりました。仏教が喜びの場にも入っているのを見て感動すると共に、タイ国は日常生活のすべてに仏教が浸透していることに驚きました。

小畑節朗（松戸市常盤平）

坐禅はただ長い期間やっていることばかりではだめで、坐ったところがそのまま仏というような坐り方が出来たらと思うのですがむ

ずかしいなと思うこの頃です。

寺田哲朗（千葉市宮野木町）

毎月の参禅会の帰りに、別に住む母の所へ寄るのが楽しみの一つで、坐禅は私に親孝行をさせてくれており幸せです。

徳山 浩（松戸市胡録台）

あと二、三ヶ月で、参禅をはじめてから丸二年になります。この頃は坐禅が待ちどおしくなります。学生時代、『正法眼蔵』を自分のものにすべく挑戦したのですが物になりませんでした。坐禅のあとのご住職の『正法眼蔵』の提唱が楽しみの一つです。

武山喜代子（我孫子市船戸）

今は参禅が楽しみの一つになりました。最初は一時間坐っていられたら続けようと思ってやりはじめました。お陰様でずっと続けて坐らせていただいております。以前坐禅のあとの法話で「生も一時の位なり、死も一時の位なり」のお話が、大変心の安らぎをいただきました。

平沢満代（松戸市小金原）

毎月この参禅会は楽しみに通わせていただいております、有難いと思っております。

小嶋喜子（松戸市常盤平）

何もわからないながら坐禅をさせていたいておりますが、自分

の心の中に警策を感じるような自分でありたいと思っております。

小嶋 進（松戸市常盤平）

坐禅を続けることによって新しい自己発見ができれば、と思っております。

神戸 正（柏市桜台）

この参禅会が日に日に盛大になっていくのは大変嬉しく思います。私はご住職のお話を聞くのが楽しみであり、またこの会の舵とるをする先輩方のリードが素晴らしい、このご縁を大事にしていきたいと思えます。

塩崎康之（柏市桜台）

義父のすすめで参禅をはじめて一年たちました。坐ることの大変さを感じている此の頃です。

中嶋南洲男（流山市東深井）

人生の出会いということとは、因果のお話にもあるようにご縁でございます。ここにめぐり合せていただいたことに感謝いたします。

富田文子（印西市大森）

参禅をはじめて五年たちました。長く坐らせていただきながら、坐禅中に妄想が浮かび、そこから逃げられませんが、無心に坐れる坐禅になれる日をと頑張っています。或る参禅の日、私は捻挫したため坐禅をさぼり、そのくせ柏に用があって柏駅のホームに降り立って

向いのホームを見た時、そこにお住職様が電車を待っておられました。すべて見られている世界を知り、悪いことは出来ないと感じたこともございました。

村井ハマ（柏市柏）

今年の六月から参禅させていたいております。今は一所懸命勉強したいと念じております。

染谷はる（柏市柏）

私も六月からはじめさせていたしております。今は妄想の中の坐禅ですが、これが無になるまで体が持ったら幸せだと思っています。

青柳守英（沼南町高柳）

般若心経を声を出して読んだの



只管打坐する会員

は、今日が生まれてはじめてのことでした。このお経をあげさせていたでいるうちに、素晴らしい気持ちをもつことができました。

三町 勲（我孫子市高野山）

坐禅をはじめて二年近くなりますが、まだ足が痛い状態です。月一回の参禅会ですの思うにまかせないこともあり、継続することのむずかしさを感じております。本日ご住職より因果の道理についてお話があり、今の生活が未来において答をいただきたいと思います、真剣に生きなければならぬと考えさせられました。

野田市鏡田寺副住職青藤孝光師

昨年も成道会に参加させていただきましたが、皆さんの参禅の姿勢が一段と整ってきているのに驚きました。胸を張って背すじを延ばす美しい姿勢が坐禅の姿で、普段の生活がすべて禅に通じるものとなるよう願っております。

野田市普門寺副住職宗藤幸生師

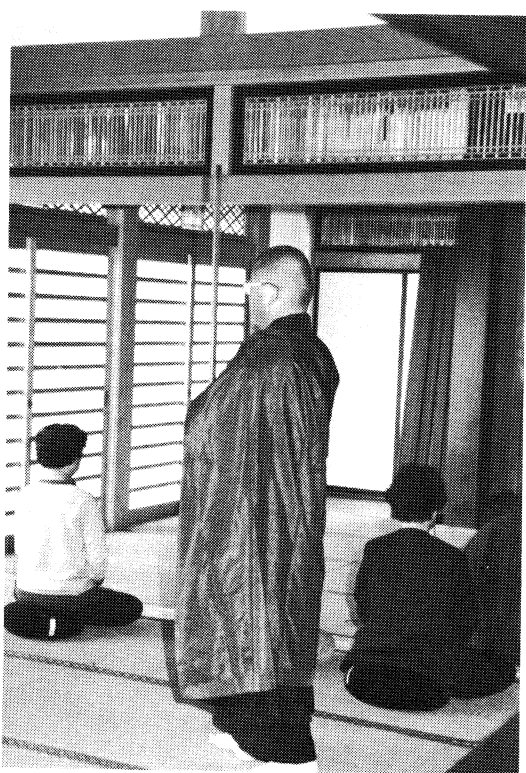
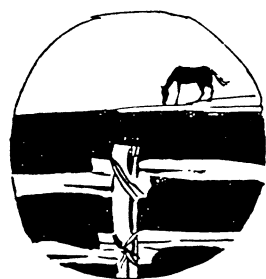
坐相の姿はさまざまですが、長く坐り続けて、何かを見つけて下さい。

流山市春山寺副住職福田康夫師

参禅されている皆様のお姿は、いろいろな仏様を見た思いでした。ご注意ください。素直に直される姿に感動しました。

竜泉院 椎名宏雄老師

皆さま方は寒い中を早くからお出かけ下され、特に成道会の幹事の方々には、その準備に大変なご苦労をおかけいたしました。今皆さま方よりの一言をお聞かせいただき、これを全部合わせると正にお釈迦さまと同じであると思われました。私は役職上偉そうなお話を申しあげておりますが、ただ道元禅師さまのお教えを紹介させていただいているにすぎません。これからも皆さま方と一緒に精進してまいりたいと存じます。



警策も回って

参禅を続けて

富田 文子

書きたいことがたくさんありますが、老婦には一向まとまりのつかない文になってしまいます。朝九時の坐禅で、御住職から無心になってとの御言葉に努力して居ますが、なかなか私には出来ないことです。如何すればとお聞きしましたら、煩惱よこいこいとか数を数えなさいとの御意見を聞き、自分なりにやっている現在ですが、凡人には出来難いことです。次の講義では、道元禅師様の仏法の教えをわかり易く、お忙しい御身体で春夏秋冬お元気で講義をして下さいます。その時だけは教えの隅を覗いた様な感じですが、到底生きていく限りもっと勉強しなければと私は無学を恥じます。又その後、茶菓を頂きながら皆様の経験談や御住職への質問などがあり、時には面白いお話などで一同楽しい集りです。

こんな境地になれる参禅会は、私だけではもったいないと思います。一人でも多く集まって頂けた

らと、これ迄の五年間思っております。現在には多くの方達がお見えになり嬉しく思います。一昨年四月殿堂落慶式に参列させて頂き、莊厳と申しましょるか筆舌に表わすことの出来ない感激でございました。これも参禅会のお蔭と感謝致しております。いろいろお世話をおかけする高間様、森岡様、小畑様、寺田様御兄弟を始め、会員の皆様と何時迄もこの交が出来ます様、両手を合せ私も身体の続く限り参禅致すつもりであります。最近のつたない句を二首書いてみました。

父母おわす 浄土への道

ただ坐禅

落銀杏 拾ふ子等の

足輕し



作刀と坐禅 (一)

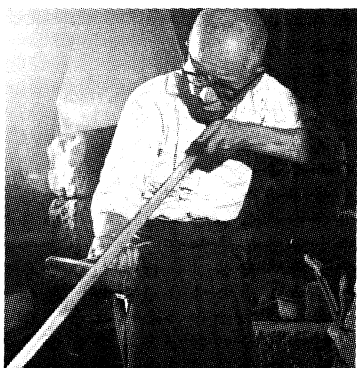
当寺参禅会員で「南海太郎正尊」の銘を持つ刀工森岡俊雄さんに、常に本質が作品に不断に現われ、小さな疵や凹みも許されない刀鍛冶の世界と坐禅とのかゝわりなどを連載いたします。第一回は「型」について

「型」本質を行くもの

森岡 俊雄

日本刀の本質を行くものとはどういうものであるか。

拙工は毎日こればかり考えてお



先年、日経ビジネスに紹介された森岡さん

ります。

一、折れず。二、曲らず。三、良く切れて。四、使い易い。

こういうものは姿が良いのです。

この四点を、一つだけ取り立てて強調するのではなく、全部の調和が取れてなければなりません。古来の名刀はこれを具備しています。正宗の活躍した鎌倉時代が最も名刀の出た時で、道元禅師御在世の時代と一致します。

さて何事によらず基本型と申すものがあります。型は師匠が教えてくれたものをそのまゝ受けるのが一番良い事です。いわゆる「守」であります。師匠が名人であればある程、「守」によって得られるものは大であります。

第二段階は「破」であります。これは師匠の刀が昔の名人に比べて劣る時におこります。異なる型を考えて鍛練してみる段階です。

第三段階の「離」とは自分で一番良い型、刀でいえば鍛練方法を発見し、実際に名刀が出来た時です。

拙工は、万道を習うという事は、基本型を習う事と考えております。また小学生の算数のように、習ってすぐ出来るものではありません。剣道の例を取っても、昔から刀は持ち方だけでも三年かゝると申し

ます。青少年時代、毎日本格的に練習しての事です。出来る出来ないと申しても、上を見れば限りがない事です。

さて本職の刀剣鍛練の事になりますが、私は無器用と申しますか愚鈍と申しますか、一通り型は半人足に出来ませんが、自分の型は出来ておりません。昭和二〇年の敗戦後、刀は無用の長物となり、生活面で苦勞いたしましたし、又廻り道もしました。刀の修行で何度体をこわしたか判りません。

結論から申しますと、「破」だの「離」だのということは理想の

先生が居られない時、万止むを得ずやることでありまして、理想に近い先生が居られたらやることではありません。

こんどは坐禅の話になります。私は「守」一点張だと思いが、私には「守」一点張だと思いが、又やっております。師弟の間で問題になるのは落差でありますし、五〇年かゝって本職の刀工がうまく行かぬ私に、坐禅がうまく行く訳がありません。

現御師家様と私の落差は無限にあります。でありますから、私は「守」一点張で教えていただきます。拙文で恐れ入ります。



山門頭の老杉

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと。）

一、坐禅 止^し静^{じょう} 鐘 三声 坐禅
經^{きん}行^{ひん} 鐘 二声 經行

放 鐘 一聲 放 鐘

一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』

の提唱を聴く

講師 龍泉院住職椎名宏雄老師

昭和六〇年四月より「一顆明珠」の巻

を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも

参加できます。

一、会費^{じょうどうえ} 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜に開催

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後

法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雜記

昨年来、当参禅会の会報を発行したいという声が高まり、ここに釈尊降誕の吉辰を期して「明珠」の名のもとに創刊します。

「明珠」の明珠たる所以は、椎名老師の玉稿でお示しの通りであります。

五八年に、第一回「成道会坐禅会」を開催した時、差定（プログラム）を作り参加者全員に配布しましたが、その全ての表紙に老師が「明珠」とお書き下さったのです。今回会報の名前をつけるに当って、この御縁を頂いて「明珠」と名づけた次第であります。

第二回「成道会」は寺田哲朗氏に実行委員長の勞をとっていただき、昨年一二月二日、掲載の記事のように盛会のうちに終了いたしました。「点心」の用意の他に有志の御協力を賜り、深く感謝申し上げます。

「今、成道会に思うこと」は、会員の高野千代子さんが「点心」の後の座談会での皆さんの発言をまとめられた力作です。又写真も、同じく会員の藤原公氏の撮影によるものを掲載させていただきまし

成道会には、龍泉院老師からは『仏教聖典』（仏教伝道協会発行）を、又会員で刀工森岡俊雄氏（号正尊）より文鎮が、それぞれ参加者全員に贈られました。文鎮は、『永平広録』巻一〇にある道元禪師のお言葉を引いて、

六年苦行 一坐成覚 昭和甲子成道会

と森岡氏によって刻まれたものでした。

また有志の方々より祝賀を賜りました。誌面を借りて厚くお礼申し上げます。

高間先達が言われるように、「一年をたゞ平たく並べるのではなく、薄紙のような一年でも積み重ねて」の言葉は重い言葉であります。続けることの難しさを、古人は「相続は大難」と申しているそうです。未熟で弁道などとは程遠い坐禅ではありますが、仏祖の行履を慕い坐禅を続けて行きたいと願っております。

この「明珠」も、皆様の「明珠」を「明珠」あらしめるべく、坐禅仏行の証として永く相続できま

すように、何卒よろしく御協力御支援をお願いする次第であります。（節光道人記）